

認知症になっても、誰もが安心して暮らせるまちへ



生活の中での要望を把握
地域包括支援センターなどから得た情報や、本人への聞き取りなどを通して、認知症の人が何を求めているかを把握します。



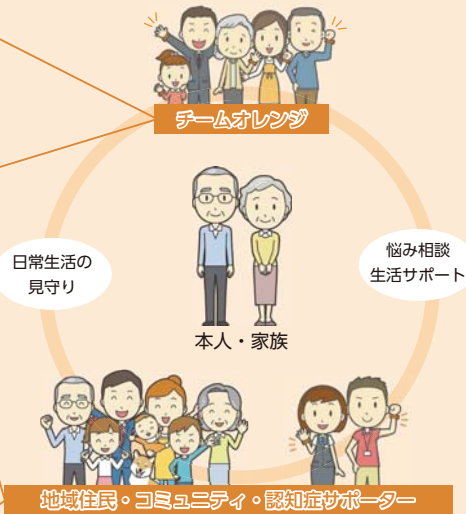
地域内でできるサポートを検討
聞き取った要望をもとに、地域内でどんなことができるかを検討し、チームオレンジのメンバーが外出のサポートや相談に応じます。



認知症の基本を学ぶ
各地域や小学校などで認知症サポーター養成講座開催。「目を見て話す」「相手を不安にさせない」など、声かけのポイントを学びます。



認知症徘徊者搜索模擬訓練
搜索の流れなどをキャラバンメイトによる寸劇で学んだあと、徘徊者の特徴を元に、まちに出て訪れそうな場所を中心に搜索訓練を行います。



- 認知症になっても、居場所・活躍できる場所がある
- 認知症に理解のある地域住民が見守ってくれる。

支援が必要な高齢者を地域で見守る

チームオレンジが誕生

誰もが年を重ねれば、周りの人の支援が必要となります。高齢者世帯や一人暮らしの高齢者が地域で増えてきている今、地域での見守りが大切となっています。そんな中、高齢者を見守っていく新たな取り組み「チームオレンジ」が、西地区スマイルコミュニティで始まりました。 図健康福祉課 ☎ 61-1350



※チームオレンジのメンバー

私たち一人ひとりにも、できることがあります

声かけが認知症徘徊者の命を救う

昨年12月24日、認知症で家に帰れなくなっていた高齢者を発見・保護した坂橋美佑さん（市野坪町）。市の緊急情報メール（関連5ページ）に記載された特徴に似た男性を仕事帰りに見かけ、声をかけました。「真冬に防寒着を着ず、信号が変わっても横断歩道を渡ろうとしなかったの、様子がおかしいと思ったんです」と振り返る坂橋さん。「こんにちは」「どちらに行かれるんですか」と質問すると、話がかみ合わ

なかったため、警察に連絡。男性は無事警察に保護され、自宅に帰ることができました。

坂橋さんは声かけについて、「最初は「似ているだけだったらどうしよう」と躊躇しました。でも、もし行方不明になっている人だったら、声をかけなきゃ後悔すると思ったんです。男性が無事に家族のもとに帰れて、本当によかったです」と話していました。



知症の人の外出支援や話し相手など、地域暮らしのサポートに取り組んでいきます。また、チームには認知症を抱える当事者（軽度）や、認知症の人の家族も参加。当事者側がどんな支援を必要としているのかも踏まえながら活動していきます。

各地域にオレンジの輪を
市では今後も、チームオレンジが各地域コミュニティに

広がりが、立ち上がるようにサポートしていきます。認知症になっても、住み慣れた地域で暮らし続けられる地域を目指して。チームオレンジの今後の活躍に注目です。

▼チームオレンジの愛称を募集しています。詳細は西地区スマイルコミュニティのホームページ（↓QR）をご覧ください。



地域での見守りの重要性
厚生労働省は、2025年に65歳以上の5人に1人が認知症になると予想しています。認知症は脳の病気で、自身の体調の変化や疲れを感じにくくなる人もいます。症状の1つ「徘徊」では、外出した後、行き先や帰り道を忘れて行方不明になり、怪我や事故で命を落とす危険性もあります。周りの人が認知症の症状を正しく理解し、変化に気付く人が増えれば、認知症になつたとしても、住み慣れた地域で安心して暮らしていけます。各地域で高齢者が増加傾向にある今、認知症サポーターのように認知症に理解のある人を増やし、自然に声を掛け合える住民同士のつながりを広げ、地域が持つ見守る力を高めていくことが大切です。

高齢者を地域で支える
一人ひとりが、身近な高齢者に気をかける。そのために市では、各地域コミュニティや小学校、保育園などで「認知症サポーター養成講座」や「認知症徘徊者

搜索模擬訓練」などを毎年開催。こうした講座を受講したサポーターの数は現在、市内で4千人を超えています。そんなサポーターを中心に、自分たちの住む地域を、より認知症にやさしい地域にしようとして3月1日、西地区スマイルコミュニティで新たに「チームオレンジ」が立ち上がりました。メンバーの皆さんは、ステップアップ研修で、「自分たちの地域がどうなれば、認知症になつても暮らしやすいか」などを議論。地域包括支援センターや社会福祉協議会などと連携しつつ、認

